

ばんえい熱闘の舞台 コースの概要と見どころ

世界で唯一、帯広競馬場だけで開催されているばんえい競馬。舞台となるコースも歴史とともに変化し、世界に類を見ない独自のものになりました。

直線二百メートルのセパレートコース

普通の平地競馬は芝かダート（砂）のオープンコース※で行われますが、ばんえい競馬はふたつの障害がある直線二百メートルのダートコース、それも一頭あたり幅一・八メートルのセパレートコース※で競われます。

ばんえい競走馬は重量物を載せたそりをひき、このコースを駆け、登り、時に止まりながらゴールを目指します。

※オープンコース/各馬の走路が規定されていないコース。
※セパレートコース/各馬の走路が決められているコース。他の走路を侵すと失格となる場合がある。

年度ごとに走路の砂を一新

コースに使われている砂は十勝川上流の岩を砕いた「ピリ砂」。レースを繰り返すと砂は摩耗し、

そりが滑りやすくなってタイムに影響します。晴天時には砂けむりが舞って視界を遮ることも。そのため年度終了ごとに砂の入れ替え作業を行っています。

ヒーティング完備で通年開催

帯広競馬場の本走路にはヒーティングシステムが完備され、冬季も凍結することなくレースが開催されています。ヒーティングが導入されたのは平成六年のこと。ばんえい競馬がまだ四市で開催されていた当時、正月もレースを開催したいという要望が高まり、降雪量の少ない帯広だけに設置されました。

コース下の地中にパイプが埋められ、電光掲示板の裏手にあるボイラー室で不凍液を温めてパイプ内に循環させています。



1 スタートゲート

全長約21m、フルゲート10頭のスタートゲートに各馬が勢揃い。きゅう務員がゲートを離れ、スターターが磁石式ゲートのスイッチを切るとゲートがオープン。各馬が一斉に飛び出す。



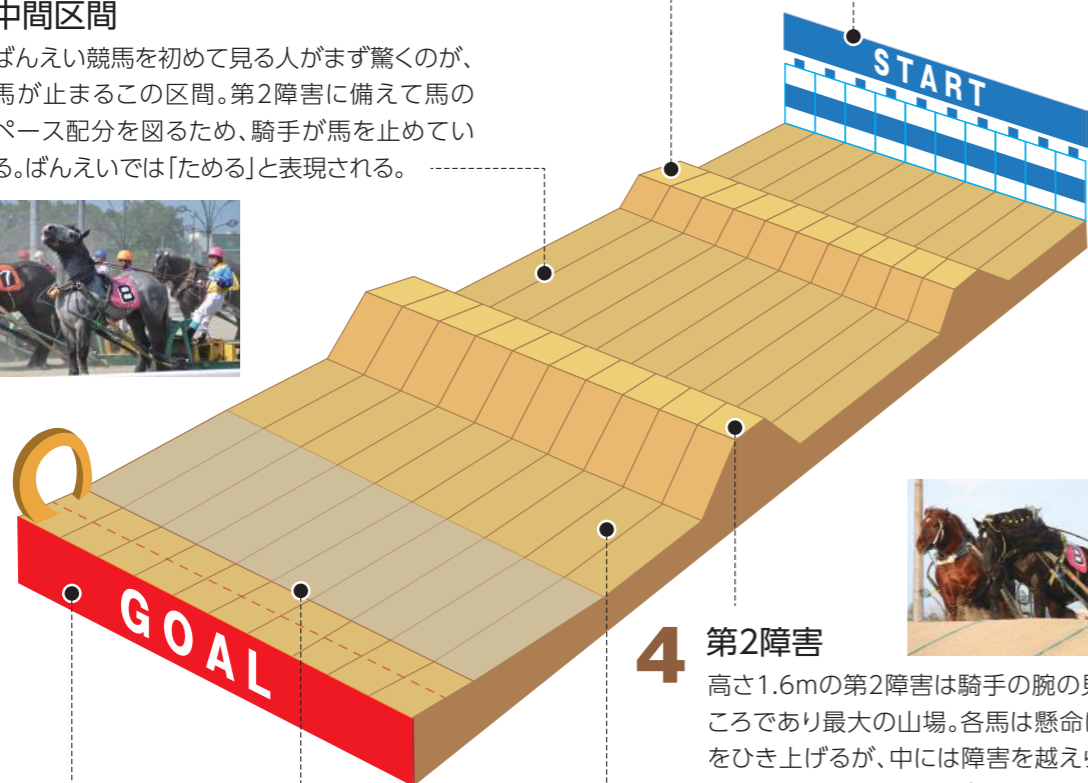
2 第1障害

スタート直後の馬はスタミナ十分。高さ1mの第1障害を一気に越える。



3 中間区間

ばんえい競馬を初めて見る人がまず驚くのが、馬が止まるこの区間。第2障害に備えて馬のペース配分を図るため、騎手が馬を止めている。ばんえいでは「ためる」と表現される。



4 第2障害

高さ1.6mの第2障害は騎手の腕の見せどころであり最大の山場。各馬は懸命にそりをひき上げるが、中には障害を越えられず膝をついてしまう馬も。ばんえいでは「膝を折る」と表現される。見守るファンから最も熱い声援が上がるのがこの場面。



5 後半区間

第2障害を越えた後、騎手は馬を止めることはできない。しばしば波乱が起こるのがこの区間。真っ先に第2障害を越えた馬が、スタミナ切れで止まってしまう、後続馬がトップに踊り出ることも。

6 砂障害

ゴール前には最後の難関、高さ0.5mの上り勾配がついた砂障害が待ち構え、より白熱したレースを演出する。この砂障害は、冬季は走路凍結防止のため撤去される。



7 ゴール

ばんえいでは、その後端がゴールラインを通過した時点でゴールと認定する。ゴール間際で先頭の馬が止まってしまうこともあり、最後まで目が離せない。

